

メリケンカルカヤの分布調査

* メリケンカルカヤの特徴 *

イネ科 ウシクサ属 *Andropogon virginicus* L

乾燥した荒地・路傍から湿った放棄水田・湿地など、幅広い環境に生える多年草で、北アメリカ原産の帰化植物。南アメリカ、アジア、オーストラリアに帰化している。

茎はそう生（地際で枝分かれしてして株になる形）し、次第に大株となる。9月～10月頃、高さ50cm～80cm程度の直立した稈（かん：イネ科の茎のこと）を多数伸ばし、稈全体に穂をつける。穂には白い長毛を備えた小穂があり、種子はわずかな風でも広範囲に散布される。

葉鞘（ようしょう：葉の基部の稈を包む部分）のふちの部分には密に白色の長毛が生える。稈の基部は葉鞘に包まれ、扁平な形状（断面は紡錘形）である。葉鞘部の長毛とともに稈が伸びていない時期の同定ポイントとなる。

直立した稈は種子が熟すころ赤褐色に色づき、独特の姿となる。稈は直立した姿のまま立ち枯れ、場合によっては翌年新しい稈が出てくる直前まで残ることもある。



穂が出てきたら、緑色の時に刈り取っても、種ができて、散布して拡がってしまいます。
<処置方法> 刈り取ったものは、野辺に放置せずに必ず燃えるゴミに出してください。



葉鞘部分

葉鞘のふちの部分には密に白い長毛が生える。



イネ科は種類が多く、穂が出たばかりの時期は見分けにくいですが、成長するに従って大きな株になっていきます。茎は強く、直立した独特の形状になります。株が小さく、緑色の頃は写真のように扁平で、毛がはえていますので、そこで見分けてください。

稈の基部断面

葉鞘が稈を包み、扁平な形状となる。

メリケンカルカヤの穂

穂は白い長毛を持つ有柄小穂2本と、長い芒（のげ）を持つ無柄小穂1本がセットとなり、種子は風によって散布される。

メリケンカルカヤは、特に高速道路周辺部から拡がっています。こういう道路は、山間部も通っていますので、かなりの里山の畔などにも分布が広がっています。

草刈りも機械を使っているため、根を残した状態のため、翌年も同じように発生してしまいます。また、草刈りがされた後に成長することも多く、時期を逸すると一面がメリケンカルカヤだけになり、冬季は枯れた状態のまま林立し種をとばしつづけます。そして、近くにきれいに整地された芝生などがあれば、逆に侵入してしまいます。

根の部分で増殖し、大きな株となっていきますので、出来るだけ早く抜き取る作業が必要です。

<地図の記録の仕方>

生育量：おおよそ10㎡に、10株未満は「少」、10株以上～100株未満は「普」、100株以上は「多」

地図に色分けをしてください。（少→青・普→黄・多→赤）

生育環境：放棄水田・道路わき・公園の芝生…等、どのような環境に生育していたかをお書きください。

上記の内容は、岡山大学 資源生物科学研究所 野生植物研究室 のホームページより抜粋しました。

(<http://www.rib.okayama-u.ac.jp/wild/index.sjis.html>)

今回のメリケンカルカヤの調査は、文部科学省の研究プロジェクト「外来植物のリスク評価と蔓延防止策」に協力することも目的としています。